

農業問題 I

カウッキーは、不動産抵当の真の意義、その進歩的な歴史的な性格（農業経営者からの土地の分離は農業社会化の条件の一つである、88ページ）[155 ページ]、および農業の資本主義的進化におけるその必然的な役割を、正確に、そして明白に規定している。

注) マルクスは、『資本論』第三巻で、この過程を指摘し（いろいろな国におけるそのいろいろな形態は分析していないが）、こういうふうに「労働条件としての土地が土地所有および土地所有者から分離すること」は「資本主義的生産様式の偉大な功績」である、と述べている（第三巻、第二部 156~157 ページ、ロシア語訳 509~510 ページ）

コメント

[第三七章 665~666 ページ]。

純粹に、理論的に資本主義の発展を研究するならば、土地は私的所有から分離されて使用されたほうがよい。

農民の中で何を主張すべきか

小経営と小所有を資本主義の攻撃からまもることによって農民をすくおうと試みるのは、社会の発展を阻止しようとするむだ骨をおること、資本主義のもとでも幸福は可能であるという幻想で農民を欺くこと、多数者を犠牲にして少数者のために特権的地位をつくりだすことによって勤労諸階級を分裂させることを意味するであろう。……………われわれは、わが国の農村を奴隷制度のあらゆる遺物から解放する諸要求——農民の最良の部分のなかに、自主的な政治闘争ではないまでも、労働者階級の解放闘争にたいする意識的な支持を呼びおこすことのできる諸要求——を、かならず自分の綱領にふくめなければならないのだ。もしわれわれが、社会の発展を阻止したり、小農を資本主義の成長や大規模生産の発展から人為的にまもったりする傾きのある方策を主張しようとするのだったら、われわれは誤りをおかすことになるだろう。だが、もしわれわれが、一八六一年二月十九日の改革が地主や官吏によって歪曲されたためにはたさなかった民主主義的諸要求を農民のあいだにひろめるために、労働運動を利用することができないなら、その誤りはいっそう致命的であろう。わが党が専制にたいする闘争のために全人民の先頭に立とうとおもうなら、このような諸要求をふくめることはわが党にとって必要である。だが、それをふくめても、そのことはけっして、われわれが活動的な革命勢力を都市から農村へ呼びよせはじめることを予想するものではない。これはいうまでもないことである。党のすべての戦闘分子は都市と工場中心地を志向しなければならないこと、ただ産業プロレタリアートだけが専制にたいする不退転の大衆闘争を行う能力があること、ただこのプロレタリアートだけが、公然たるデモンストレーションの組織とか、規則ただしく発行されひろく配布される**人民**の政治新聞の組織とかいうような闘争手段の担い手となりうること、これにはなんの疑いもない。われわれが自分の綱領に農民の要求を入れなければならないのは、確信的な社会民主主義者を都市から農村に呼びよせるためでも、また彼らを農村にしばりつけるためでもない。そうではなく、それは、農村以外には充用され**えない**勢力に活動の指針をあたえるためであり、また、社会民主主義者にたいして献身的なすくなからぬ数のインテリゲンツィアと労働者が、いろいろの事情の**おかげで**特ちあわせている農村とのつながり、運動の成長に伴って必然的に拡大し増大していくこのつながりを、民主主義の事業と自由獲得

の政治闘争とのために利用するためである。かつてわれわれがちっぽけな志願兵部隊であって、社会民主主義勢力の全予備軍といえば、だれもかれも「労働者のところへ出かけていった」もろもろの青年サークルに尽きていた段階、この段階をわれわれはすでにとっくの昔にこえて成長している。いまではわれわれの運動は、さながら一軍隊を擁している。すなわち、社会主義と自由のための闘争に引き入れられた労働者の軍隊、——以前からひきつづき運動に参加しており、いまではすでにロシアのあらゆるすみずみにちらばっているインテリゲンツィアの軍隊——また、信頼と希望をもって労働運動を注視しており、これに幾千の貢献をする用意のある同情者の軍隊が、それである。そこで、われわれは偉大な任務に当面する。それは、これらすべての軍隊を組織する任務、しかも、われわれが刹那的な燃えあがりをおこすことができるだけでなく、敵に偶発的な、ばらばらの（したがってまた危険のない）打撃をくわえることができるだけでなく、全線にわたる、ひたむきの、頑強な、持久的な闘争によって敵を追撃することができ、専制政府が抑圧を蒔き憎悪を刈りとっているいたるところでこの政府を狩りたてることのできるような仕方、それを組織する任務である。ところで、幾千万の農民大衆のなかに、階級闘争と政治的意識の種子をもちこまずに、この目的を達成することがいったい可能であろうか？ それをもちこむことは不可能だといってはならない。それは、可能なばかりか、すでに行われていることであり、われわれの注意と働きかけのおよばない幾千の方法によって行われていることである。われわれがこのような働きかけのためのスローガンにあたえることができ、恥ずべき農奴制度のいっさいの残存物からのロシアの農民の解放の旗をかかげるときには、この持ちこみは、はかりしれないほど広範にまた急速に行われるであろう。都市にやってくる農村人は、いまでもすでに好奇心と関心をもって、彼らには理解できない労働者の闘争を観察し、それについての報知を片田舎のすみずみまでももちはこんでいる。われわれは、局外の観察者のこの好奇心を、労働者は全人民の利益のためにたたかっているのだということの、完全な理解ではないまでも、せめてその漠然とした意識と入れかわらせ、労働者の闘争にたいするますます大きな共感と入れかわらせることができるしまたそうしなければならぬ。そして、そうなった暁には、警察政府にたいする革命的労働者党の勝利の日は、われわれ自身にさえ意外な、夢想さえしなかった早さで近づいてくるであろう。

第四卷 労働者党と農民 P463-467 1901年2月に執筆

1901年四月に新聞『イスクラ』第三号に発表

コメント

小経営と小所有をまもるための、社会の発展を阻止し、彼らの特権的地位を守るような主張・要求は勤労諸階級の分裂をもたらす。

しかし、私たちは彼らの民主主義的な要求を彼ら自身のものにするために、私たちの運動（労働運動）を使わないならば、私たちの誤りは致命的なものとなる。

ただし、それは産業プロレタリアートに対する働きかけを弱めて小経営や小所有のために勢力をさくことを意味するものではない。

それは、彼らと結びつきがあり、そこでしか活動できない人々に活動の指針をあて、彼らの中に労働者階級の解放闘争にたいする意識的な支持を呼びおこすためである。

わたしが「全線にわたる、ひたむきの、頑強な、持久的な闘争によって敵を追撃する」

ためには、小経営や小所有者の中に「階級闘争と政治的意識の種子を」もちこまずに、その目的を達成することはできない。

そのために、小経営や小所有者と結びつきを持っている人々が民主主義的な要求を広め、「労働者（私たち）は全人民の利益のためにたたかっているのだということの、完全な理解」、「労働者の闘争にたいするますます大きな共感」をえることが必要である。

このようにして、国民の中に労働者に対する広範な信頼が広がるならば、「革命的労働者党の勝利の日は、われわれ自身にさえ意想外な、夢想さえしなかった早さで近づいてくるであろう。」

そして、今、なによりも必要なことは、革命的労働者党（共産党）に対する労働者の圧倒的な共感と参加を実現するために、**全エネルギー**を注ぐことである。